

一日十秒のプチお彼岸

●故郷を離れて

親鸞聖人が東国布教の頃、恵信尼さまとともに二十年住まわれたという、茨城県笠間市の稲田禅房西念寺。先日、夫の実家がある築西市に帰省した際、夫婦でお参りしてきました。初めて訪れた西念寺は、緑の山々に囲まれ、とても爽やかな風が吹いており、穏やかな時間が流れていました。親鸞聖人は稲田の山々の眺めに、遠く離れた京の比叡山を思い出されたといえます。親鸞聖人が愛されたという山々を静かに見入り、何とも温かな気持ちに包まれました。

私は昨年結婚し、住み慣れた地元京都を離れ、現在、東京に暮らしています。京生まれ京育ちの京都っ子だったので、ちょっと寂しいのが本音です。シンガーソングライターという職業柄、全国あちこちへ歌いに行く道中、京都に帰り実家に泊まるのが多々ありますが、それでもふと故郷が懐かしくなる時があります。

京都の街並みを優しく見守る大文字山のふもとにある北白川の実家。一日の終わりに部屋窓から大文字山を眺め、「今日も一日、ありがとございました。南無阿弥陀仏」と心の中となえ合掌するのが、私の日課でした。特に秋になると、空気が澄んで遠くには星も見えます。二十四時間のうちのたった十秒の「プチお彼岸」なる日課ですが、不思議と心が安らかくなりました。手を合わせ眺めた夜の京の風景は、まぶたに焼き付いていて、消えることはありません。

もちろん東京で暮らしている今も、この日課は続いています。「今日もありがとございました。南無阿弥陀仏」と心となえる時、今自分がどこにいて、生きている不思議さ、ありがたさを感じます。思えば、これまでどれだけ多くの力に支えられてきたことだろう。多くの人々の力に支えられ、ようやくここまでやってこられた。すべてはありがたいご縁のおかげだなあ、と思うのです。

●「つじあやの」の誕生

しかし私にも、「何でも自分一人ではできず、やってみせる」と息巻いていた時代がありました。まだ十代という大学生の頃です。

私は、龍谷大学の文学部史学科に入学、東洋史学を専攻し、同時に「フォークソング認定同好会 黄色いトマト」という音楽サークルに入部しました。恥ずかしながら、学業よりも趣味の音楽に夢中になる毎日でした。授業に出席しつつ、サークル活動に精を出し、次第に自分が歌いたい歌、やりたい音楽を見つけていきました。そうして、ウクレレを弾いて歌うというスタイルに自信を持ち、二年生の半ばでサークルを退部。サークルを飛び出し、「うららか」というバンドを結成し、京都のライブハウスで音楽活動を始めようとなりました。

ところがどっこい。サークルではそこその実力でしたが、いざ学生の枠を超え京都の音楽シーンで活動を始めると、まさに「井の中の蛙」状態。コンサートを開いてもなかなかお客さんが集まらなかったり、自分より上手くて人気のあるバンドや歌手に刺激を受けて、落ち込んだりしました。広い世界に出て初めて、い

かに自分がちっぽけかを思い知らされる日々。それでも何とか頑張って活動を続けていきましたが、「うららか」は解散することになってしまいました。

「もう音楽はあきらめて、就職活動しようか…」くじけそうになった時、私を励ましてくれたのが、音楽活動をする中で出会った仲間たちでした。「あやのちゃんの音楽は絶対いいから、もうちょっと頑張ってみようよ」と、コンサートの場を与えてくれた人。バンドが解散していなくなったメンバーの代わりに、ギターを弾いてくれた音楽仲間。毎回、「コンサートに足を運んでくれていたお客さんや友人たち。」

そして、それだけではありません。音楽という新しい世界でなかなか芽が出ない私を支えてくれたのが、龍谷大学の教室でもありました。授業では、私が知らない、もっと広い世界で生きた人々の情熱を教えてもらいました。果てしない抗争を繰り返してモンゴル統一を成し遂げ、夢を追い、駆け抜けたチンギスハン。命をかけ、飛行機も車もない時代にインドから中国を歩き、仏教を伝えられた三蔵法師。そして何より、弾圧にも負けず、己と向き合い、弱き人々を救おうとされた親鸞聖人。志を貫き、逆境にも耐え、真実に向かう強い精神を持った、その尊いお姿に、私は勇気付けられました。

「自分なんかまだまだだよ。もっと頑張れるはず！いや、頑張ってみよう！」

その頑張りが届いたのか、大学在学中にビクターレコードから、「つじあやの」としてレコードデビューすることができました。学生からいきなりプロになってしまい、右も左もわからず周りのスタッフには迷惑をかけたのですが、デビューから三年たった二〇〇二年に、スタジオジブリ作品「猫の恩返し」の主題歌を担当することが決定。「風になる」という曲がジブリ作品の主題歌ということで注目され、たくさんの人に「つじあやの」を知ってもらえるきっかけになったのです。

「風になる」の成功は、私一人の頑張りではなく、辛抱強く見守り助けてくれたスタッフや、音楽仲間や家族、親友たちの支えがあつて成し得たことだと思っています。デビューしてまもなく十七年がたとうとしています。これまで歌い続けられたことにありがたい気持ちでいっぱいです。



●人生の灯をいたたく

今暮らしている東京の夜空には大文字山は見えないけれど、星が輝き、人々が暮らしている小さな灯りが、ぼつぼつと街を照らしています。そのひとつひとつに不思議なご縁があるのでしよう。

余談ではありますが、稲田の山々を一緒に眺めた夫とは音楽仲間の紹介で知り合い、ともに歩む夫婦となりました。出会って間もない頃の共通の話題は五木寛之さんの小説『親鸞』で、親鸞聖人が百日間参籠された京都の六角堂に行き、紅白の蝋燭を二人で灯したこともありました。昨年四月に龍谷大学大宮学舎本館で挙げていただいた結婚式は、二人の一生の宝物になりました。何か優しく、ありがたいご縁で出会わせていただいた、そんな気がしてなりません。

まだまだ夢の途中で迷いながら、人生を歩んでいます。そんな時、大事なことを見失ってしまう時もあります。だからこそ、これまでの感謝を忘れないように、今日も一日の終わりに十秒だけ心となえます。

「今日も一日ありがとございました。南無阿弥陀仏」
これからもずっと、この日課を続けていこうと思います。

春には春の花が咲き 夏には夏の風が吹く
秋には秋の愛しさを 冬には冬の優しさを

つじあやの

1978年、京都生まれ。高校でフォークソング部に入部しウクレレを始める。初期の吉田拓郎やスピッツなどの穏やかでのんびりした曲との出会いもあり、鴨川のほとりで友達を集めてのミニライブや自身での作詞作曲活動をスタート。1999年9月にミニアルバムでスピードスターレコーズよりデビュー。スタジオジブリ映画「猫の恩返し」の主題歌「風になる」のヒットなどで知られる。現在も年間10本近いCM等を制作する傍ら、ウクレレをフィーチャーした独自の音楽性とやわらかな歌声で安らぎを与え続けている。



つじあやの

つじあやの